

平城京研究史と今後の展望

武田和哉

はじめに

平城京に関する本格的な研究は、江戸時代末期の北浦定政を嚆矢として見なすことができ、日本の古代都城の中でもとりわけ早くからその存在と重要性が認識されて研究が行われてきた経緯がある。また、条坊跡が遺存地割に反映されて良好に残存しているという極めて貴重なフィールドでもあり、周辺の条里制との関係などについても、従来から研究の対象として扱われてきた。加えて、最近では発掘調査件数の増加に伴い、条坊関連遺構の検出・確認や、宅地内遺構の様相の把握が進み、そこから出土する遺物の詳細な検討を通じて、土地利用状況や時代的変遷等についても研究の対象となりつつある。

本稿では、平城京研究史についてあらためて確認・検証をしつつ、今後の研究の展望や方向性について探ってみたいと考える。

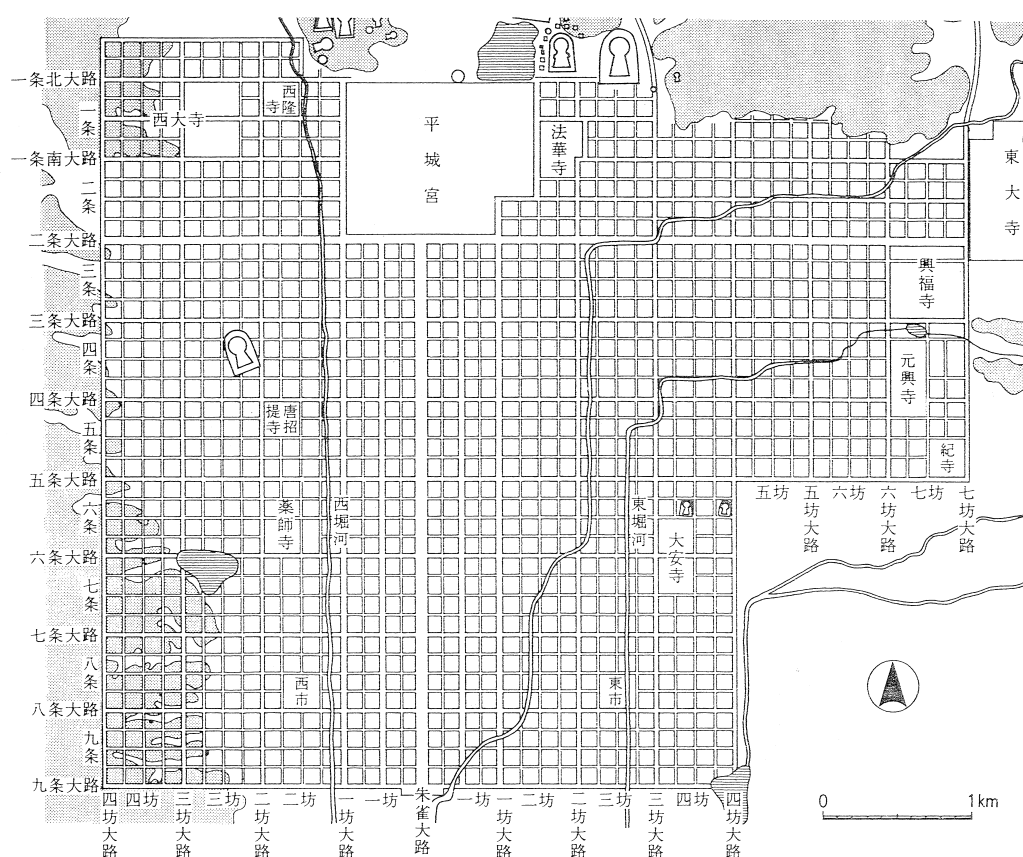


Fig.142 平城京条坊概念図（田中琢編『平城京』〔古代日本を発掘する3〕岩波書店1988より）

1. 平城京研究史 1 - 1945年以前の研究史 -

平城京の研究を振り返る際に、まずは先学の業績や思想についてまとめておきたい。本章では、主として近代以降の動向について述べてゆきたい。

北浦定政 江戸時代末期の国学者である。1817（文化十四）年に大和国添上郡古市村に生まれ、長じて津藩に出仕して同藩士となった。その後国学を学び、陵墓や条里、宮跡の研究を行うようになった。彼は自身で考案した測量車を使用して平城京跡内の各地を計測し、多くの成果を残している。また西大寺に伝わる古図や様々な古文書を渉猟して1852（嘉永五）年には『平城宮大内裏跡坪割之図』をまとめている。彼の復原によると、朱雀大路の両側に東西幅4坊分を想定し、京の南限は北之庄村の池の堤と郡山植槻筋を結ぶ線とし、ここを起点に北へ9条分の街区を想定するというものであった。さらにその北側に南北2坪分の「北辺」を想定する。ただし、現在「外京」として想定される地域は、洛外として京域には含まなかった。彼の復原案は、地形等から条坊道路を想定しているの、かならずしも各条坊街区の寸法は一致していない。このほか、条坊道路の幅員の問題は明確な考察対象として扱っていない。1871（明治四）年に没す。

関野 貞^{ただし} 建築史研究者で、1867（慶應三）年に越後高田藩士の子として生まれる。帝国工科大学を卒業後に、古社寺保存のために奈良県に赴任して1897（明治三十）年に奈良県技師となり、1901（明治三十四）年には東京帝国大学工科大学助教授となって、その後は終生日本の古建築の研究・保存に尽くした。克（建築史）・雄（考古学）は子息である。関野は建築を専門とするところから、当時としては精度の高い地形測量図等を作製し、特に平城宮域については「平城京及大内裏考」〔東京帝国大学紀要工科3 1907〕としてまとめ、更に唐の都城との比較検討を通じて所見を述べる。関野の条坊復原は北浦定政のそれと一致する点が多い。ただし、左京の二条から五条までを東に延長して「外京」として仮称し想定した点、平城京内の寺院において現存する遺構を地図上に落として図上で条坊の距離を測定し、それらをもとに造営寸法や造営単位尺について初めて詳細な検討を行った点などが、彼の独自の指摘とあらたな試みであるとして注目されるであろう。また、後述する喜田貞吉との論争を経て、北浦が「北辺」と称した部分を右京域に関してのみ認めている。

喜田貞吉^{さだきち} 1871（明治四）年に阿波国那賀郡（現在の徳島県小松島市）に生まれる。1896（明治二十九）年に帝国大学文科大学国史学科を卒業し、大学院を経た後文部省に入り、図書審査官として国定教科書の編修にあたる。その後京都帝国大学に転じ、退官後は東北帝国大学で教鞭を執った。古代史の研究者ではあったが、遺物や遺跡の考古学的研究や地理学、民俗学などの研究も採り入れ、当時では先鋭的とも言える手法で研究を行った。平城京に関する研究では『帝都』〔日本学術普及会 1915〕を著し、参謀本部陸地測量部作製の二万分の一の地図を使って平城京の規模を計測し、東西曲尺1400丈、南北曲尺1584丈との値を得た。これを東西8坊、南北9条に等分するならば1坊が曲尺176丈四方ということになり、仮に大宝小尺1尺を曲尺の0.978倍として換算するなら、1坊が小尺180丈（大尺150丈＝1里）となる点を指摘している。そして、このような試算等を経て、最終的には平城京は東西8里、南北9里の規模で設計されたという結論を導く。なお、前掲の関野貞とは平城京に関する問題と法隆寺再建に係る問題で論争を行ったことで有名である。

上記の研究者による平城京研究は、先駆的な位置を占めており、現代の図面や測量精度の基準とした観点からみるとどうしても不完全である点是否めないであろうが、限られた手段の中で平城京のほぼ全体の規模を想定している点や、地名や地形、遺存地割等に着目して条坊復原を行い今日においても使用

されている研究手法の根幹の多くを創出している点では、極めて貴重な成果と言えよう。また、造営尺や寸法の問題に言及したり、北辺坊や外京の想定など、重要な問題の提示もなされている点には注目をしなければならない。

2．平城京研究史 2 - 1946～1970年代に至るまでの研究史 -

戦前の研究を受け継いで、戦後もいくつかの重要な研究が発表されている。本章では、概ね1980年より以前の研究史について概観するものである。

大井重二郎^{じゅうじろう} 1908（明治四十一年）年に奈良県に生まれる。京都帝国大学文学部国史学科を経て、京都第二商業学校教員、陸軍教授、京都府立鴨沂高校副校長などを歴任した。国文学研究が専門で、平城京研究においても多くの研究を残しており、それらの成果をまとめた『平城京と条坊制度の研究』（初音書房 1966）を刊行し、いくつかの重要な指摘をしている。京域に関する問題では、「北辺坊」の存在には否定的であり、平城宮北辺のラインを北京極と想定した。また、「外京」については平城京の造営当初からの計画ではなくのちに拡張したものとしてみている。大井の研究手法の特徴は、古代から中世を中心とした時期に係る膨大な史料・古文書の渉猟に基づく条坊関係記述の収集と、それらより帰納される事実の指摘である。更に、平安京遷都以降の廃絶過程について言及した点は先駆的である。更には、条里と都城との問題、造営寸法や道路幅員の問題についても考察しており、都城に係わる様々な現象を総合的に理解を目指す志向は、現在の研究につながるものとして評価できる。

奈良国立文化財研究所による調査研究 第二次大戦後に奈良県内に設置された奈良国立文化財研究所は、主として平城京や藤原京、飛鳥京および古代寺院に関する調査研究を手掛けてきた。平城宮・京に関していえば、『平城宮発掘調査報告』などをはじめ多くの発掘調査報告書、史料、その他膨大な成果物を刊行して、現在も日本における都城研究の一大拠点としての役割を果たしている。中でも1962（昭和三十七）年に刊行された『平城宮発掘調査報告Ⅱ』において、平城京の造営規模について詳細な研究成果が報告されており、注目される見解が示されている。すなわち、条坊計画については、一坊を1800小尺であるとする見解を踏襲しつつも、発掘調査で検出した条坊道路の幅員に広狭の差があることに着目し、平城京の条坊設定方式は1800小尺方格の基準線を設定したのちに、両側に条坊幅員の半分ずつの距離を条坊道路用地として取り込んだと推定した。その結果、「坪」とよばれる宅地部分は接する条坊道路の幅員の広狭によって面積が異なることを指摘している。その上で、京内寺院の伽藍中心線の位置関係についても考察し、これらが周辺の条坊の位置と合致しているを見なして、造営尺の問題にも言及する。ただ、この考察の中で、興福寺の伽藍中心線だけが周辺の条坊想定位置と大きく隔たるとし、遺存地割の考察とも併せて、外京の東西幅が狭かったと指摘し、その原因を造営尺の違いかあるいは造営寸法の違いと見なして、造営の時期が当初よりも遅れた可能性をも指摘するものである。

大岡實 1925（大正十五）年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業した大岡は、その後大学院を経て、文部省技師として古建築の保存に携わり、戦後は横浜国立大学教授として建築史の研究に大きな足跡を残した。大岡は、興福寺などをはじめとする南都諸寺院の伽藍配置の研究を長年に渡り手掛け、1966（昭和四十一年）年には、『南都七大寺の研究』（中央公論美術出版 1966）を刊行したが、その中では、興福寺と周辺の条坊との関連について、外京が興福寺を取り込むために設けられたものであり、設定時期は平城京造営当初とした。

その後、1975（昭和五十）年には『興福寺仮金堂発掘調査報告書』（興福寺）において興福寺の伽藍

復原の問題をあらためて論じ、また太田博太郎が前述の奈良国立文化財研究所の見解を示しつつ、外京の問題と興福寺の造営の問題を一体の問題として考え、条坊寸法の違いが興福寺や外京の造営時期の手かがりであるとする見解を提示したのを受けて、規模が異なるのは地勢などの関係からであって、条坊施工の実施年代の差とみなくてもよいと主張してもいる。

岸俊男 奈良県の文化財技師であった岸熊吉の子息として生まれた岸俊男は京都大学卒業後に母校の教授となり、奈良県立橿原考古学研究所の所長も歴任したが、日本古代の宮および都城の研究について多くの研究を残した。その成果は、『日本古代宮都の研究』（岩波書店 1988）など多くの著書に結実している。平城京の研究において、特に触れなければならないのは、遺存地割の研究であろう。1974（昭和五十九）年に刊行された『平城京朱雀大路発掘調査報告』（奈良市）に所収の「遺存地割・地名による平城京の条坊復原調査」がそれである。この研究は、奈良国立文化財研究所が作製した1000分の1の地図などを利用して、当時まで平城京跡の域内に良好に残存していた地割の様相を把握し、条坊の位置や幅員などを想定した。更には、字名などの地名や古文書の記述などを手がかりに、平城京内の各所の諸問題についても提起している。精緻な作業を積み重ねた結果、詳細な遺存地割図が作製されており、現在の平城京の調査・研究に多大な寄与をしたと言わねばならない。ただし、最新の発掘調査事例による限りでは、遺存地割で想定した幅員と実際に発掘調査で検出された条坊遺構の幅員とは差があり、遺存地割よりも想定した幅員の方が広い傾向にある。これについては、後述の舘野和己による研究があるが、遺存地割とは、平城京の廃絶段階を大きく反映したものであるもので、どうしても条坊遺構そのものの規模を示すものではないことが、近年の調査・研究の成果から見えつつある。よって、当研究で岸が想定した条坊道路の幅員は、実際よりは大きい数値となっている点是否めない。ただし、遺存地割の研究自体が無意味であるということではなく、廃絶過程や廃絶後の土地利用等を研究する上では極めて貴重な出掛かりであることは言を待たない。

以上、戦後の平城京に関する研究状況について、主要なものを概観した。上記以外にも田村吉永、太田博太郎、坪井清足、鈴木嘉吉、田中琢など多くの諸先学による数多くの研究や貢献、更には奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市教育委員会、大和郡山市教育委員会、奈良大学、奈良女子大学などによる発掘調査報告があるが、紙幅と時間の関係上割愛させて頂いたことを、ここでお断りしておきたい。

3．平城京研究史 3 - 1980年代以降の研究史 -

奈良県を含めた日本国内の埋蔵文化財行政は、概ね1980年前後には各都道府県および主要な市町村では調査体制が整いはじめ、その後に景気の高揚に伴う都市開発等の盛行時期を迎え、発掘調査の件数が増加してゆく。

そもそも日本の古代都城遺跡の大半は、現代における都市またはその近郊に位置しており、近年の都市化と開発の増大によって、緊急発掘調査の件数が飛躍的に増大している。こうした調査は、開発に伴う遺跡破壊を前提としたものが殆どであるので、遺跡保護の観点からみれば手放して喜べる状態ではない。しかしながら、そうしたかけがえのない代償と引き替えのような形で多く実施されてきている発掘調査により確認された成果・新知見によって、都城遺跡の様相把握が一段と進んだという皮肉な面も否定できないであろう。本章では、最近の主要な研究成果について紹介するが、紙幅と時間の関係もあるので主要なものに留めることとし、すべてを網羅できないことを予めお断りしておきたい。

町田章 奈良国立文化財研究所入所以来、平城宮・京の調査に長く携わり、平城宮跡発掘調査部長を経て、後身の独立行政法人奈良文化財研究所長に就任した。1986（昭和六十一）年に刊行された『平城京』（ニュー・サイエンス社）は、平城京の研究史、諸問題、調査の成果を平易かつコンパクトにまとめており、研究者や調査関係者のみならず一般者も多く利用する図書である。近年は、殊に発掘調査成果の社会還元や普及啓発活動の重要性が認識されつつあり、様々な概説書や入門書が刊行されているが、本書はまさに平城京に関しての嚆矢に該当しよう。本書では、平城京の概要について述べ、当時の最新の調査成果を多く採り入れ、図面を多く駆使して研究の現状を解説する。

また、従来より論究の的とされていた外京の規模については、前述の奈良国立文化財研究所による『平城宮跡発掘調査報告Ⅱ』における見解を採用せず、距離的に問題がないと述べている。ただし、その根拠は本書の中では詳細には示されていない。

井上和人 奈良国立文化財研究所に入所後、藤原宮・京や平城宮・京の調査を長年にわたり手掛ける傍ら、条里制や都城制に関する諸問題について多くの研究を発表してきている。特に1984（昭和五十九）年に発表された「古代都城制地割再考」〔『奈良国立文化財研究所研究論集』Ⅶ〕や、1994（平成六）年の「条里制地割施工年代考」〔『条里制研究の一視点 - 奈良盆地における条里地割施工年代について - 』私家本〕は、極めて精緻な分析と計算に裏打ちされた研究であり、現在の古代都城制・条里制研究に与えた影響は大きく、前者は発表後二十余年を経た今日でも、調査研究に携わる者が必読すべき研究と言えるであろう。この他にも数多くの研究を発表しており、2004（平成十六）年に『古代都城制条里制の実証的研究』（学生社）という論集となって集成された。研究手法は、遺構の検討や位置の計算のみならず、文献の検討や地形図等の分析などに至るまで多くの視点から検討を積み重ねて結論を導くもので、説得力に富んでいる。北辺坊に関しては、2003年に「平城京右京北辺坊考」が発表され、北辺坊と西大寺寺域のふたつの大きな問題について、体系的に分析を行い、奈良時代後半に右京北域に西隆寺・西大寺を造営するのに関係して拡張・造営されたという結論を説く。

山中章 向日市において長岡宮・京の調査研究に長年従事し、その後三重大学に転じた。都城制を遺構だけでなく、遺物分析の観点からみた分析・研究を積み重ねている。また、長岡京のみならず、藤原京や平城京、平安京といった他の古代都城との比較検討を通じて、多くの重要な指摘があり、近年『日本古代都城制の研究』（柏書房 1997）および『長岡京研究序説』（塙書房 2001）を刊行した。平城京に関しては「古代条坊制論」〔『考古学研究』38 - 4 1993〕でいくつか注目される指摘をしており、条坊道路の設定方法について、前掲の奈良国立文化財研究所が指摘したような条坊計画線から両側に等距離幅分を設定する方式の他に、条坊計画線から片側にのみ条坊用地を設定する方式の存在についてもその可能性を主張する。ただし、この指摘については、のちに前掲の井上和人により反論が提出されている。

舘野和己 奈良国立文化財研究所にて史料調査と発掘調査を長年手掛け、その後は奈良女子大学に転じた。古代史研究全般において多くの著作をもつほか、前述の岸俊男の遺存地割の研究を受け継いで、遺存地割の特徴や傾向等について検討を行い、平城京の廃絶過程やその後の様相を知る重要な手掛かりとして再評価した〔『古代都城制廃絶後の変遷過程』科研報告書 2000〕。現在、発掘調査で検出される条坊遺構は、遺存地割に比べて大きい傾向にあるが、これは条坊道路とその両側に存在していたであろう側溝部分や築地等の部分が含まれているからであると指摘した。すなわち、平安時代におこった平城京の廃絶と田畑化は、まず築地や条坊関連施設に囲まれた宅地の内部から発生し、移動空間として比較的遅い時期まで機能していたとみられる条坊道路や側溝等や付随する空間は、その後の段階で田畑化したとみられ、そうした経緯が遺存地割に反映されていると指摘している。また、北辺坊に関しては、文献

史料の分析を通じてその造営時期を想定し、史料的にみる限りでは、少なくとも奈良時代には北辺坊が存在した形跡はみられないとする見解を提示した。

その他 1980年以降に発表された平城京に関する研究は多くあり、さまざまな視点からの研究がさなれている。本章では紙幅と時間の制約上、主要なものについてのみ以下に記しておくので、適宜参照されたい。下記以外にも多くの研究があることも附言しておく。

坪井清足 『古代を考える 宮都発掘』 吉川弘文館 1987

田辺征夫 『平城京を掘る』 吉川弘文館 1992

金子裕之 『平城京の精神文化』〔角川選書282〕 角川書店 1997

武田和哉 「平城京外京条坊制考」『奈良古代史論集』3 真陽社 1997

小澤 毅 「都城としての平城京」『奈良県史 8 建築』 名著出版 1998

舘野和己 『古代都市平城京の世界』〔日本史リブレット7〕 山川出版社 2001

武田和哉 「日本古代都城の条坊施工の一側面 - 幅員の変化する条坊道路の存在 - 」『立命館大学考古学論集Ⅱ』 立命館大学考古学論集刊行会 2001

武田和哉 「平城京跡発掘調査の成果と条坊制研究の課題 - 附 平城京関係発掘調査報告書一覧（稿）」『条里制・古代都市研究』18 2002

狭川真一 「元興寺の設計と外京」『続文化財学論集』 奈良大学文化財学論集刊行会 2003

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 『東アジアの古代都城』〔研究論集 XIV〕 2003

佐藤信ほか『古代荘園絵図群による歴史景観の復元的研究』〔科研報告書〕2003《佐藤信編2005『西大寺古絵図の世界』東大出版会として刊行》

4．平城京の新知見 - 最近の成果の概要 -

本章では、主として1990年頃以降の調査で新たに確認された成果などをもとに、平城京の遺跡の様相について概観する。

条坊道路 近年の調査の進展によって、平城京内の条坊遺構の検出事例は数多く追加され、それによって新たな様相が判明してきた。条坊道路について言えば、従来の研究における想定を超えて、規模や幅員についてはかなりバリエーションがあることが判明しつつある。主要な検出事例はTab. 3の如くであるが、これをみると判るように、朱雀大路を除くと、大路、条・坊間路、小路という各カテゴリーの中でも、幅員が様々であることが判るであろう。更には、同じ条坊道路でありながら、場所によっては幅員が異なっている例も散見されている。大まかな傾向ではあるが、宮に近い場所の条坊道路の幅員に比べ、宮から遠隔の場所にある条坊道路の幅員の方が狭くなる傾向にあるようにも見えるが、必ずしもそうしたことが完全に貫徹されている状況でもない。

このように、条坊道路が大路、条・坊間路、小路というカテゴリーはあっても、その中での幅員規模にはかなりの差があるということ、そして同じ条坊道路でも幅員が変化するなどの事態が予測されるということになると、平城京の条坊施工はかなり複雑な様相であったとみななければならない。これは、藤原京の事例に比べるとかなり目立つ特徴と言える。藤原京の場合は、幅員のバリエーションがない訳ではないが、規格性がかなり貫徹されている印象がある。そして、平城京におけるこのような複雑な条坊施工は、その施工方法からすると、当然にして条坊道路設定後に残る部分となる宅地の面積や形状の不均衡という事態を招いていたことにもなる。

条坊設定 それでは、条坊計画自体も複雑な体系であったのかということ、実はそうではない。上記のような複雑な様相を示す各条坊道路の幅員ではあるが、両側溝心々間の中心位置を計算して、それが京内

Tab. 3 古代都城の条坊道路の幅員例
(武田和哉「平城京跡発掘調査の成果と条坊制研究の課題」『条里制・古代都市研究』18 より)

各都城の条坊道路幅の検出事例					
都城名	朱雀大路	大路クラス	条間路・坊間路クラス	小路クラス	典拠
藤原京	70大尺 (拡張後) 45大尺 (拡張前)	70大尺・六条大路 (20.8~21.4m) =横大路 45大尺・二条大路ほか (偶数大路)	25大尺・一条大路ほか (奇数大路)	20大尺・一条条間路ほか (条間・坊間路)	奈文研『藤原京研究資料 (1998)』 1998ほか
平城京	210大尺 (73.4~ 74.0m・五 条) 210大尺 (74.0m・ 朱雀門前)	105大尺・二条大路 (37.3m・宮南辺) 70大尺・西一坊大路 (24.9m・宮西辺) 80小尺・東一坊大路 (23.7m・宮南東) 65大尺・三条大路 (22.7m・右京一坊) 60大尺・西三坊大路 (21.3m・五条) 45大尺・三条大路 (15.7m・左京四坊) 45大尺・東四坊大路 (約16m・四条) 45大尺・西二坊大路 (15.6m・二条) 40大尺・六条大路 (約14.4m・左京一坊)	70大尺・西一坊坊間路 (24.9m・八条) 60大尺・東一坊坊間路 (21.4m・三条) 50大 (60小) 尺・東二坊坊間路 (19.2m・宮東) 45大尺・二条条間路 (約16m・右京三坊) 30大尺・四条条間路 (10.7m・左京二坊) 25~30大尺東二坊坊間路 (約10m・三条) 25大尺・三条条間路ほか5例 20小尺・一条条間路 (5.92m・右京三坊)	25大尺・西二坊坊間東小路 (8.4m・一条) 20大尺・一条条間北小路ほか12例 15~20大尺・五条条間北小路ほか3例 15大尺・二条条間北小路ほか1例 10大尺・東一坊坊間西小路 (3.7m・五条)	後掲註8) 武田論文 ほか
長岡京	170大尺 (推定)	150小尺・二条大路 85小尺・西一坊大路ほか3例 80小尺・三条大路ほか6例 50小尺・西二坊大路	85小尺・二条条間路ほか2例 55~60小尺・四条条間路 (L-9) 45小尺・四条条間路 (L-2) 35小尺・東二坊坊間路ほか9例 30小尺・七条条間路 (L-251) 25小尺・四条条間路 (L-353等)・西二坊坊間路	30小尺・一条条間南小路ほか多数 25小尺・五条条間南小路 (L-228)	辻純一「長岡京条坊復原における一考察」 『研究紀要1』京都市理 文研 1994、後掲註16) 岩松 論文ほか
平安京 (参考)	28丈 (延喜式)	17丈・二条大路 12丈・大宮大路ほか1例 10丈・一条大路ほか8例 8丈・三条大路ほか9例 (延喜式)		8丈・堀川小路ほか1例 4丈・坊城小路ほか46例 (延喜式)	『延喜式』 「左右京職式」 京程条

※ 1 表中の検出幅 (m) は、両側溝心間距離を示している。
2 参考として挙げた平安京の条坊幅員は、調査の検出事例でなく、『延喜式』の記述から採録している。

においてどのような位置関係を示しているのか計算してみると、意外にも多くの部分においてほぼ375大尺 (450小尺 = 約133m) の間隔で存在していることがほぼ確認される。逆に考えると、すべての条坊道路がそうであるという確認はまだ出来ていないものの、かなりの割合で条坊道路の中心部分は、375大尺という間隔を保って規則的に割り付けられているということが判る。このことは条坊施工の第一段階であったと推定される条坊計画線の設定が、375大尺間隔の方格体系という、極めて素朴な骨格であったということを示していよう。一見して複雑な様相を示す条坊道路施工も、その基本的な骨格である条坊計画線の段階では、実は基本的にシンプルなプランであったことには留意しておく必要がある。

ただし、平城京内でも、場所によっては条坊計画線の体系に若干異なった様相もないわけではない。大まかな傾向としては、平城京の南部や右京域については、ほんの僅かではあるが間隔が広くなる傾向が見て取れる。また、最近の井上和人の指摘によれば、今回の検討対象となっている平城京右京北辺坊の隣接地付近では、若干のズレが認められるという。こうした現象がなぜ起こったのかについては、まだ詳細は判明していない。今後の調査の蓄積などを待って検討していく必要がある。

宅地内の遺構の様相 条坊道路に囲まれた宅地内の様相についても、近年の調査件数の増加に伴い、多くの坪においてさまざまな様相が確認されている。まず、平城京内の坪は、いずれも同様な利用や時期的変遷を辿っていたのではなく、場所によって様々な利用環境であったことが判明している。例えば、平城京右京二条三坊付近の調査では、坪内をいくつかの細かい区画に分割して利用していることが判っている (Fig.143)。各区画に併せて井戸が掘られている形跡があることから、おそらく細分化した宅地であったものとみられる。また、ここでは奈良時代前半と思しき遺構が少ないのに対して、奈良時代後半から平安時代前半にかけては複数時期の遺構変遷がみられる。このように、平城京内の調査では、奈良時代前半に該当する遺構が見つかる例は少ないが、紫香楽宮より遷都して以降の時期の遺構はかなり見つかっており、それは長岡京遷都後も同様であって、平安時代前半頃のものも相当検出されている。

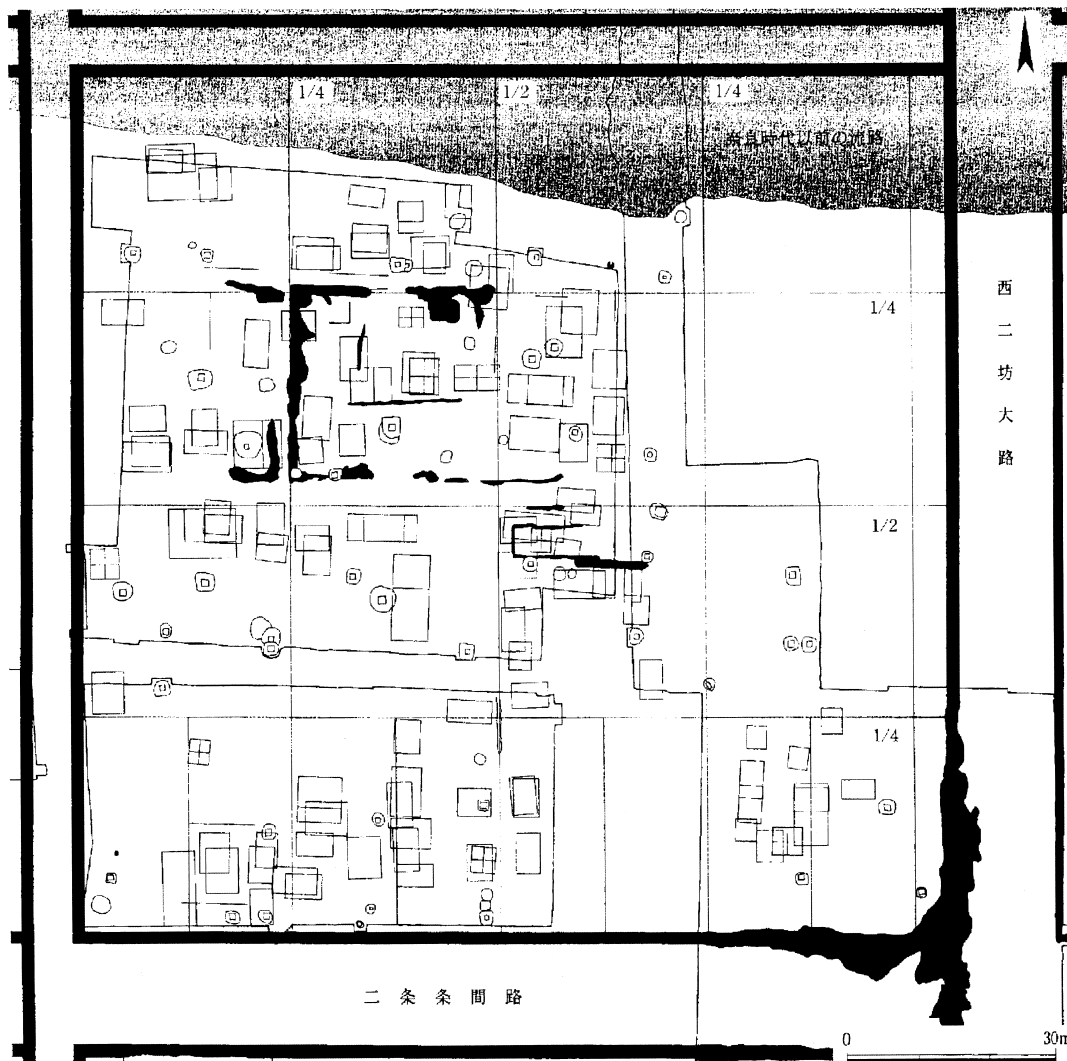


Fig.143 平城京右京二条三坊一坪の遺構の様相

（奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』 2001 より）

こうした傾向を受けて、当然ながら出土遺物についても同様の傾向があり、例えば土器の出土量の大きな傾向をみても、奈良時代後半を中心として平安時代初期までの遺物が特に多い様相となっている。

この奈良時代から平安時代初期にかけての時期においては、土器の使用方法や形態、あるいは流通に関しては、極端な変革などの事態がなかったと考えられるし、また使用後の廃棄方法についても同様に大きな変化が無かったと仮定するならば、こうした出土量の傾向とは概ね当該時期の平城京内の人口の推移・動向をある程度反映していると考えて良いのではないかとと思われるのである。

宅地内の土地利用の意外な側面 ところで、発掘調査では奈良時代や平安時代の遺構が殆どみつからなかった坪もある。これは、左京四条五坊一坪がそうであるが（Fig.144）ここで注意しなければならないことは、遺構が見つからなかったことが直ちに遺構が存在しなかったということの根拠とはならないという点である。現在の平城京内における奈良時代から平安時代にかけての遺構面は、その後の都の廃絶に伴う田畑化によってある程度の削平をされていることが多いからである。また、中世以降の時期には粘土採掘を行っている場合も多くある。実際この左京四条五坊一坪はそうした粘土採掘が多くみられる場所でもある。ただし、これらの削平については極端な場合でも1mを超えるような例はそれほど多

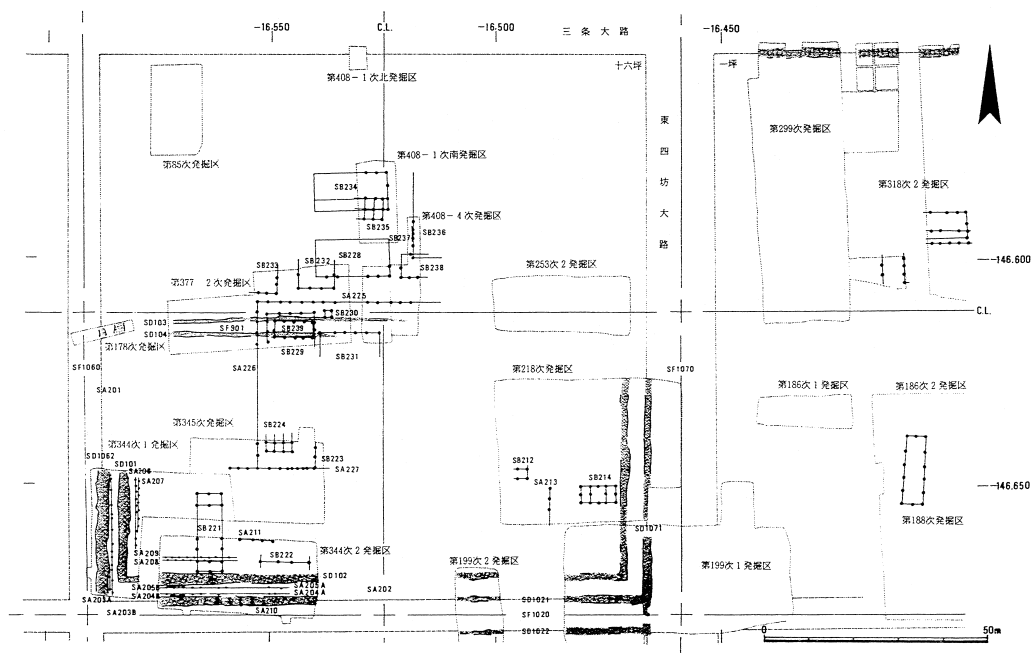


Fig.144 平城京左京四条四坊十六坪と四条五坊一坪の遺構の様相

(奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成7年度』 1996 より)

くは考えられないから、掘立柱柱穴のような遺構は消滅する可能性があるとしても、井戸のような深い遺構までを消滅せしめることにはならない。そうした点に着目すると、やはり左京四条五坊一坪は坪の約三分の二を発掘調査したものの当該時期の井戸が僅かに1基しか見つかっていないのはやはり不自然である。その様相は、隣接する左京四条四坊十六坪の調査状況とも比較してみると一目瞭然である。この坪も左京四条五坊一坪と同様に、中世以降の粘土採掘坑が分布しているのではあるが、それらの下層からいくつかの掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。両坪の間には、極端な地形変化や高低差は見出しにくいことを考慮すると、左京四条五坊一坪の様相が特異であることがより一層明らかとなるであろう。

このように、奈良時代を通じて土地利用の痕跡が少ない宅地は、部分的なものを含めると、平城京内ではいくつかみられるようである。こうしたことは、一見整備されている条坊街区の中には意外に空閑地が存在していたという実態を垣間見せるものとして注目されよう。空閑地がいかなる利用実態であったのかを確かめるすべはなかなか見当たらないが、耕作地のような状態であった可能性も否定できない。平城京の廃絶 従来の研究では、主として平城京の構造や造営規模などに大きな関心がおかれ、平安時代以降に平城京域が如何にして廃絶して田畑化していったかという研究はむしろ盛んではなかったようにも思われる。かつて遺存地割に関する体系的な考察・分析を行った岸俊男の研究を継承した舘野和己は、遺存地割が平城京が廃絶していく過程を反映したものと評価して、その様相を発掘調査の成果と比較することで、廃絶の過程を探ろうとした。例えば、左京七条一坊六坪での事例をみると、遺存地割とされる田畑の規模に対して、実際の発掘調査で検出された条坊道路の幅員は狭いことが明確である (Fig.145)。これについては前項で舘野の見解を紹介したが、平城京域が田畑化していくには二段階あり、まず誰も住まなくなった宅地部分がまず田畑化して、その次の段階では移動・閉塞・排水の空間であった条坊道路や側溝、築地などの部分が田畑化した結果、こうした田畑の畦畔の様相となったのではないかと考察しており、極めて興味深い指摘であると言えよう。

また、平城京内における発掘調査で、中世以降の遺構が検出されることはよくみられることであるが、そうした遺構の分布についてもある程度の傾向がみられるようである。例えば、薬師寺・唐招提寺の周辺や、東市跡が想定されている辰市地区の付近などでは、他の地区に比べて中世以降の時期の遺構の密度が高い傾向にある。今回の調査で見つかった中世以降の遺構群についても、その様相には興味深い状況がみられ、これらの成果は平城京が廃絶したのちの様相を考察する上では極めて重要な手がかりとなろう。今後の調査の進展と共に、京域周辺部での様相とも併せての全体的な把握と考察が期待されている。

5．今後の展望 - まとめにかえて -

平城京の研究は、これまでの諸先学による膨大な研究蓄積に加えて、近年の調査の増大に伴う多くの発掘調査成果の追加という事情もあって、新たな段階を迎えたと考えてよい。今後もバブル期ほどの件数ではないにしても、発掘調査件数・面積は高水準で推移するであろう。こうしたことを踏まえて、今後の研究の展望について私見を述べさせて頂く。

まず、調査・研究環境の整備という基本的な面については、調査を実施した機関による迅速かつ充実した内容の成果報告・公開の一言につきるであろう。現在、いずれの調査機関ともに予算・人員・時間的制約の中で苦闘しているのが実態であるが、調査成果の報告・公開についてはより一層努力する必要性を、関係者の一人として痛感している。

ところで、これまでの都城研究のうち、特に都城の遺構・遺物の研究に関しては、調査関係者の主導によってなされてきた感がある。それ自体は特別悪しきことではないが、より広い研究者層への拡がりがあり芳しくない状況であるということは、様々な視点を持った研究者の参加による研究の発展・推進が望めない環境になりつつあることを示唆しているようにも見える。かかる一種の閉塞感のある状況の改善は、今後の調査関係者の成果報告の促進や公開手段の検討等の地道な努力などに大きくかかっているのかもしれない。

以上のようなことを踏まえて、今後の重要課題として以下の諸点を指摘したい。

調査の進展と成果の分析 平城京をはじめとする都城遺跡は、一般的な傾向としては規模が大きく面積が膨大である。つまり都城における発掘調査とは、広大な遺跡範囲内に孤立した調査地点が散在しており、それらが長い時間を経て徐々に増加していくというような調査経緯を迎えることになると言える。よって、短期間で全貌を把握することはなかなか困難な面がある。ただし、毎年複数の機関で調査を実施しているのであるから、時間の経過と共に何がしかの進展・成果は必ずあるはずであり、一定の期間ごとにそれらの成果をまとめて再検討・再評価をしていくことが必要である。

調査成果の情報共有と公開 発掘調査の事実や、その後の経過、所見などについて、現在では各調査機関の間で交換する会議は一応存在しているが、行政的な調整の意味合いが大きいと言える。既に本章で前述のように、それとは別個に、各機関の調査担当者や外部の研究者が参加でき、実際の調査とも並行する形で遺跡・遺物に関する詳細な検討などを行ったり、調査・研究に密着した情報を検討し合い、共有が出来るようなシステムの必要性を痛感している。

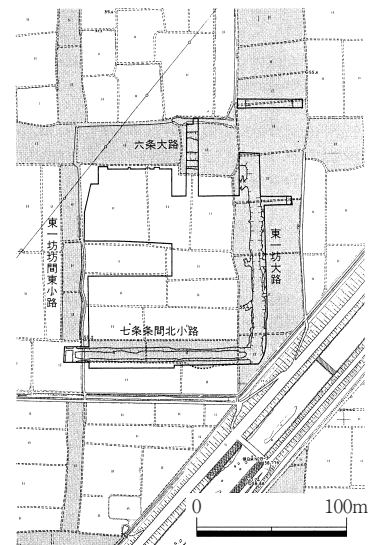


Fig.145 平城京左京七条一坊十六坪の遺存地割と検出した条坊遺構の様相

（奈良国立文化財研究所『平城京左京七条一坊 十五・十六坪発掘調査報告』1997 より）

また、調査の事実やその結果の報告の実態を詳細に把握し、そうした情報を提供する手段が見当たらないのも大きな問題点である。最近、異なる調査機関が隣接地を調査するという事態が決して稀ではなく、調査関係者ですら他機関の調査成果の検索に手間取ることもある。ましてや、調査に直接携わる立場でない研究者にとっては、かなりの手間と忍耐を強いていることが想像される。こうしたことについても、今後はデータベースの構築や公開手段の検討が必要であると考ええる。

平城京に関する研究課題 上記のような基盤整備も重要であるが、平城京の条坊制に関する研究についても、まだまだ課題が多く残っている。従来の研究では主として条坊の実態などに主眼が置かれてきた感がある。もちろん、条坊遺構の実態も未解明な点は多いのであるが、これまでの多くの調査によって蓄積されてきた宅地内の土地利用や遺構の変遷などの様相把握にも今後は留意しつつ、条坊遺構・宅地内の遺構の双方ともに分析・検討を行っていく必要があるだろう。その際には遺物の整理・分析を通しての遺構年代の把握という作業が必要不可欠となってくることは言うまでもない。

古代都城遺跡間での比較研究 平城京の中で確認されている様相については、今後は他の都城の調査・研究動向も顧慮しつつ、比較検討を積極的に行っていくことも重要であろう。同じ古代都城遺跡の範疇とはいえ、時代や環境についてはそれぞれ異なるのであるから、比較・検討に際しては留意すべき点もいくつかあろうが、遺構の規模や、変遷過程、出土遺物の様相など多くの点についての比較研究を通じて、日本の古代都城が辿った歴史的変遷過程に迫ることができるのではないかと考える。

平城京北辺坊の問題 今回の検討テーマとなった平城京右京北辺坊域は、周辺に西大寺や西隆寺、さらには秋篠寺といった寺院が密集して存在する一帯であり、中世以降の時期においても比較的土地利用の度合いが高かったとみられる地域である。こうしたことから、この地域の調査研究に際しては、多くの視点からの検討が必要となってくることは言を待たない。

現時点では北辺坊域内では調査件数・面積が比較的少ないという事情もあって、条坊遺構や宅地内遺構の実態解明が何よりも期待されているが、宅地内の様相や遺構の時期変遷の検討に際しては、平城京の前後における時代の遺構様相についても視野に入れつつ、都城という枠を超えた総合的評価が必要であると考えている。

おわりに

平城宮・京跡は、都城遺跡として極めて重要な遺跡であり、また周囲の条里制施工の年代や実態との関係などの諸問題についても検討しうるべき素材を包含している。更には都城の廃絶過程や中世都市の形成などを考察する上でも極めて示唆に富み、研究の可能性を多く含んだフィールドであるとも言えるであろう。そうした意味において、今後は単なる都城研究の枠を超えて、様々な視点からの考察・研究が期待されているであろう。

なお、今回の報告に際しては、多くの方から様々なご教示やご便宜を頂戴したが、特に下記の方からはとりわけ有益なご指導を賜ったことを、文末ながら記して謝意を表する次第である。

井上和人〔独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所〕 舘野和己〔奈良女子大学文学部〕
狭川真一・岡本広義・佐藤亜聖〔(財)元興寺文化財研究所〕 三好美穂〔奈良市教育委員会〕

〔附記〕1 本稿は、平成17年1月8日に、財団法人元興寺文化財研究所（奈良市中院町）において開催された公開シンポジウム「平城京右京北辺遺跡検討会 - 平城京研究の最先端と北辺坊 -」の際に使用した報告用ハンドアウトを基本に、一部を訂正して再構成したものである。

2 本文中の氏名については、原則として敬称は省略した。

【たけだ かずや = 奈良市教育委員会】